

安田満の〈ジャワ〉

——「歌姫アユム」を視点として——

木村 一信

はじめに

安田満は、知る人ぞ知るといった形容がふさわしい、きわめて「風格」のある小説や文章の書き手である。たとえば、小説読みの巧者ともいふべき文芸評論家の大河内昭爾は、一〇数年にわたって『文学界』誌上で「同人雜誌評」を担当してきたが、「その間作品を一冊の本にまとめたいと作者そっちのけに考えるのは、それこそごく希にしかないことである」と記し、安田の作品を読んだ折がその「希にしかないこと」だったと述べている¹⁾。鹿児島県の鹿屋市で発刊されている『火山地帯』に掲載された安田の作品「玄耳と猫と漱石と」、および「南洲先生大将服焼片」の二篇を指してのことである。大河内と同じく「同人雜誌評」を担当している文芸評論家勝又浩も、やはりこれらの作品を読んで感銘を受け、「小説全体がもっている風格のようなものがみごと」だとその評に記した²⁾。のち、この二篇は、大河内の推輓もあって、

「玄耳と猫と漱石と」との題名で単行本として刊行されたが、どこかの文庫本に収録されて多くの読者に供されてしかるべき佳品かと思われる。また、安田には、「私説 九州の文人たち」と題された長篇の評論がある（『火山地帯』、『九州文学』などに掲載）。九州との限定はあるが、その広がりはいきわめて広く、戦前・戦後の安田と同時代を生きた作家たちの貴重な言行録であり、高見順の『昭和文学盛衰史』に通底する記述のスタイルは、文学史的・文壇史的意義を有する文章と思われる。

この安田に、後述するような経歴から生み出されたところの、アジア太平洋戦争時の「ジャワ」に素材を得た二〇篇余りの小説やエッセイがある。日本軍の「軍政」による統治を受けていたジャワ（今のインドネシア共和国）の人々の様子や生活ぶり、戦争とその影響などを記した歴史書、回想記、ルポルタージュの類は数多くあるし、また、「南方徴用作家」と文学史上呼ばれる文学者たちの言説も少なからず残されているが、それらの中で、安田作品の描き出す世界は一つの確かな個性を打ちたてていると言え

よう。いま仮りに、(ジャワもの)という言葉を用いて、昭和期の戦前・戦中・戦後のジャワを文学の素材とした作品を並べてみると、安田の言説は、日本の現代文学史の中にあつて、(外地)を描いた一典型として残りうる作品と評することができるであらう。それほどの問題意識の高さ、形象の巧みさ、表現の妙といつた、すぐれた文学作品に備わっているいくつもの要素がそこには見うけられる。

ここでは、「歌姫アユム」(初出は、『火山地帯』第四〇号、一九七九・一〇)という作品を通して、その安田の(ジャワもの)の世界の一端を明かにしてみようと試みるのだが、まず、安田の経歴を辿るところから始めよう。

* * * * *

安田満の年譜にあたるものは、その著書に付せられた簡単な作者紹介、もしくは新聞などのインタビュー記事からの情報といった断片的事項しか見あたらないが、論者(木村)は、安田に自身による略年譜の作成を依頼し、返書(二〇〇一年二月九日付、書簡)でそのメモをいただいたので、それに資料を用いて補訂を加え、以下にまとめてみたい。

安田満(みつる)は、一九一五年(大正四)三月一四日、大分市の西大分生石(いくし)に生れている。父の仕事の関係で、小学校時代(二年生から)は中国山東省の膠州湾沿いにある滄口で過ごし、中学校は青島市の日本中学(四年生まで)に進学した。従つて、中国語には堪能である。その後、福岡県の若松中学に転校

し、卒業後、再び中国に渡り、天津北海大學に入学した。一九三二年(昭和七)のことである。当時は周知のように、前年の一九三一年九月、いわゆる満州事変が勃発し、翌三二年三月、日本は満州国建国を強行する。国際連盟はこれを不承認とし、国際世論は厳しい態度でもって我が国に對した。中国には反日・抗日の動きが、当然のことながら、強く巻き起つた。天津北海大學は、アメリカ人の経営する私立大學であつたが、安田は入学したものの日本人への中国人側の反発、反感が強く、登校し勉学できるような状況にはなかつたと言う。同校を卒業しえたかどうか、安田は確かではないと回想している。卒業の証書は、受け取つてはいないが、発行された可能性がある、とのこと。

中国との戦争が本格化したいわゆる日支事変(一九三七年七月)以後、徴兵検査に合格した成年男子にはいつ召集がかかつてもおかしくはなかつたが、安田もその例外に洩れず、一九三八年九月から日中戦争に兵士(下士官)として従軍した。主に、華南戦線に赴き、三九年の夏、「広東近辺の戦闘の折に、博羅付近で激しいマラリアにかかつて戦線を離脱(「黑夜」より)。野戦病院、台湾の高雄の病院、さらには日本の小倉へと転送され、一九四〇年四月、病兵として召集解除となつた。が、この後、数回にわたり陸軍あるいは海軍(佐世保での報道班勤務)からの召集を受け

た。朝日新聞西部本社へ記者として入つたのが一九四二年二月。朝日新聞社が統治地ジャワにジャワ新聞社を創設し、日刊邦字紙

『ジャワ新聞』の発刊⁵⁾を始めるのは、一九四二年二月八日からのことである。翌四三年九月、安田はこのジャワ新聞社への出向を命じられ、一〇月二日、東京・羽田より朝日の飛行機に塔乗して南へと向った。

塔乗機は、福岡を経て上海まで行き、そこで一泊。次の日、高雄經由でマニラへ（泊）。折から、フィリピンは統治していた日本軍政部「容認」のもと、独立宣言の日（一〇月一四日）を迎えようとしていた。そのにぎわいを安田は目にしたと言う。タバオにも宿泊し、続いてメナド、マカッサル、バリックバパン、バンジャルマシンを経てスラバヤへと移動。機の連続飛行可能距離もさることながら、すでに、このような小さきさみの航行しかできない状勢下にあったのだろう。ジャカルタ（一九四二年二月八日に、それまでのパタビアからジャカルタへと名が変えられていた）へ到着したのが一九日。東京から八日間を要する移動であった。ホテル・デスインデスに宿泊し、しばらく滞在。ジャワ新聞社は、このホテルの前を流れるチリウン運河を渡った斜め向かいのあたりにあり、昼食をとるためホテルに徒歩で戻ることもあった。ほどなく、ガンビル広場（現在の独立広場）南西隅のプント・ガンビル五番地にあった家に移り住んだ。ここには同じジャワ新聞社に勤める中学時代の先輩が先住者（深川周二）としていたので同居したのである。敗戦の年、すなわち一九四五年になって、クブン・シリールにあった家に移ったが隣家には漫画家として著名であった小野佐世男が住んでいた。安田の同宿者は、同勤の山本

専三記者である。

敗戦をむかえ、報道関係者や宣伝班の面々は、テガルバンジャンというボゴールの南の山あいの地に集められ、そこからガンソウランのキャンプに収容された。四五年の年末から、ジャカルタの港、タンジュンプリオークでの強制労役にかり出されたりもした。翌四六年五月、リバティシップ号に乗船してジャカルタを出港し、五月一六日に名古屋港に着く。翌日、東京の朝日新聞社に帰社し、西部本社勤務の辞令を貰う。以降、本社をはじめ、九州内のいくつかの支社に勤めたあと、一九七〇年三月、定年で退社。戦後は、「九州人」「九州文学」「火山地帯」といった同人誌を舞台として創作活動を続け、今日に至っている。

略記と言いつつも、やや細部（特にジャワ関連）にこだわって安田の事績を辿ってみたが、その理由としては次の二点が挙げられる。その一は、前述したことと関わるが、これくらいの略記であつても従来の安田に関しての年譜的事項については明らかにされていなかったこと。その二としては、安田の小説の多くは、本人の弁によると、「フィクションはあまりない」とのこと、こと（ジャワもの）に関しても年代的・時間的な事柄、場所や登場人物さらには出来事なども、ほぼ事実あるいは安田の体験に基づくことが多いと思われるからである。ここに記した事項はまだ十分とは言えないが、本稿を進める上ではほぼ足りていであろう。今後、「私説 九州の文人たち」「戦旅ジャカルタ文」（後出）などに記された事柄などを基に、より詳細な安田の作家的言動に関

わる年譜は作られなければならないと思う。

* * * * *

安田の(ジャワもの)と名づけることのできる作品を列記してみたい。このリストアップもこれまでに試みられたことがないのである。作品内容については、簡単なコメントを付す。なお、カッコ内の枚数は、四〇〇字原稿用紙換算によるものである。

〔小説〕

- 1 「朝霧」(二三〇枚)、『九州文学』第九〇冊、一九四七・二——敗戦前後のジャカルタにおける日本人男女の愛情(恋愛)を描いたもの。
- 2 「黑夜」(二二〇枚)、『九州文学』第九五冊、一九四七・一〇——ジャカルタから帰還した主人公が、夫をビルマ戦線で亡くして未亡人となつていくつての恋人と再会する話。
- 3 「宿命」——前作と同じく南方から帰つた人物の話であるが、未見。一九四九年の作。
- 4 「シオンの愛子」(一〇四枚)、『火山地帯』第二四号(一九六四・一二)、のち、『ひとつの世界——火山地帯同人作品集』に収録、一九七八・二、火山地帯社刊——実在のハンセン病医師で、ジャワにて亡くなつた邑楽(池尻)慎一の最期をモデルにした作品。
- 5 「ドスキンの服」(九五枚)、『九州人』第八一号、一九七四・一〇、のち、『ドスキンの服』に収録、一九八二・一近代文芸社刊、更に、『多佳子幻影』に収録、二〇〇三・二、文芸社刊。なお、単行本『ドスキンの服』と『多佳子幻影』の収録作品は同じである。以下の作品においては、この両作品に収録のものは、5に同じ、とのみ記す——日本で作つてジャワに持参したドスキンの服にまつわる話。中部ジャワのサラティガでの出来事が主な内容となつている。
- 6 「コモド竜」(三一枚)、『九州人』第九九号、一九七六・四——「大人の童話」とのサブ・タイトルが付けられている。ジャカルタの動物園での幻想的な話。
- 7 「メラビの猿」(四四枚)、『火山地帯』第三二号、一九七七・一〇——中部ジャワで生け捕られた猿の命を救つたことから起つた幻想的な物語。本稿で扱う「歌姫アユム」のメタファーともいふべき作品である。
- 8 「グロドック監獄」(七〇枚)、『火山地帯』第三七号、一九七九・一、5に同じ。——敗戦後のジャカルタで強制労役に服している折、目にした監獄に収監されている華僑や日本人軍人のこと。安田からの書簡には、この作品について、「S(昭和のことか——木村・注)23年ごろ九州文学のために書きましたが内容が米軍検閲にかかる恐れがあると編集者が敬遠したので、のちに火山地帯に発表したもの」と記されている。初稿から三〇年余りに世に出たことになる。
- 9 「歌姫アユム」(八五枚)、『九州人』第八八号、一九七九・八、5に同じ。——敗戦前後のジャカルタを舞台にした、日本人とインドネシア女性との恋愛を描いた作品。後に詳述する。

10 「切手譚」(八〇枚)、「九州人」第一四九号、一九八〇・六、5に同じ。——切手収集にまつわる話であるが、戦闘機で自爆した友人など、戦争の影が深い。中国・青島市、フィリピン・マニラ、ジャカルタなどでの体験、引き揚げ時の英軍による荷物の検閲などが題材。

〔童話〕

1 「ジャカルタの犬」(五五枚)、「小さい旗」第二〇号、一九六九・三、のち、単行本「犬となでしこの服と和平どん」(三人の共著)に収録、一九七一・四、牧書店刊——戦争中、ジャカルタに農業指導という役割で赴任していた青年が、唯一の慰めとして犬を飼っていたが、戦後になって訪れたジャカルタでその愛犬と再会する話。

〔評論・エッセイなど〕

1 「初期の陣中文芸」(1)〔5〕、「ジャワ新聞」第八二四〜八二八号、一九四五・四・七〜一——ジャワ宣伝班メンバーたちや将兵、一般人らの『うなばら』紙に掲載された文学的な文章を批評したものであるが、安田によれば経緯は以下の通りである。「昭和二十年四月のことで、四月一日には米軍が沖繩に上陸した。私は、ジャワの日本軍や私たちの運命が盡きる日は迫っている。戦争はやがては終る、終ったあとで、歴史はジャワの日本軍の戦闘や軍政を振り返るときが来る、それに応えるには適任者はいくらでもおろうし、資料もあるう、それは私の任ではないが「ジャワ陣中文芸史」を書くこ

となら、自分にもできる。書いておこう。いつかは日の目を見ることもあるかと思ひ立った。／私の仕事机の近くに『赤道報』『うなばら』『ジャワ新聞』の揃った綴り込みがあった」と。安田の言うように、これらの「軍政」下のジャワで発行されていた新聞には、文学者や評論家といったプロの書き手以外、すなわち、この地に従軍してきている兵士たちの文学的言説も数多く載せられていた。安田は、ジャワ新聞社での最後の仕事といった思いでもって、この連載評論を記したのであろう。なお、安田に、「ジャワ陣中文芸史のこと」と題した私家版の文章がある(一九九四・五)。

2 「日本女性の高い誇り」、「ジャワ新聞」第八六二号、一九四五・五・一六——同紙の「戦列断想」欄に掲載されたもの。同欄に、同七月、「南方移民史」と題した一文も寄せたらしいが、探索しても見当らなかつた。

3 「ジャワの佐藤春夫」、「朝日人」第六一八号、一九六九・一一——佐藤春夫のジャワ体験については論者(木村)も関心を寄せているが、ここにも貴重なエピソードが記されている。

4 「蘇曼殊遍歴」、「九州人」第六〇号、一九七三・一一——中国の文学者蘇曼殊についての安田の長年にわたる関心を記している。蘇曼殊は、ジャワとも関わった。

5 「傷める葦の人・邑楽慎一」、「九州人」第一一九号、一九七七・一一——邑楽(池尻)とジャカルタにおいて知己であ

つた安田は、その人のジャワでの遭難のさまや邑楽をモデルとした自作の小説「シオンの愛子」（安田作品には珍らしく、虚構が多い）について述べている。

6 「邑楽慎一と阿部知二」、「火山地帯」第三八号、一九七九・四——表題通りの内容であるが、ここでは阿部知二から邑楽に宛てられた八通の書簡が紹介、翻刻されている。

7 「邑楽慎一と阿部知二」補遺、「火山地帯」第三九号、一九七九・七——5、6、7の評論は、邑楽慎一についての論評をなす際、必読の文章と言えよう。

8 「戦旅ジャカルタ文（二）」、「火山地帯」第四四号、一九八〇・一〇

9 「戦旅ジャカルタ文（二）」、「火山地帯」第四五号、一九八一・一——8と9とは連載された文章で、安田がジャワへの赴任中に福岡県の戸畑に残った妻と子とへ宛てた葉書・書簡一七信が紹介されている。日付けで言えば、一九四三・一〇・二二付から一九四五・一・一八付まで。安田のジャカルタでの暮らしぶりや仕事、感じたり考えたりしていたことがよくわかる。詩作品の試みも多く記されている。

10 「ジャカルタの硯、など」、「文芸四季」創刊号、一九八二・五——未見。

11 「猿」、「火山地帯」第五一号、一九八二・七——未見。

12 「知らぬまに『シオンの愛子』が」、「火山地帯」第五三号、一九八三・一——大原富枝が「忍びてゆかな——小説津田治

子——」（単行本の第一刷版は、一九八二・六、講談社より刊行、第二刷版より加筆訂正がなされた）を世に出した折、安田に無断で「シオンの愛子」の記述を使用した、それらの経緯とその後、などについて述べている。

13 「忍び草・河合政記者」、「火山地帯」第九〇号、一九九二・四——安田がジャワ新聞社に赴任した際、編集局外勤部長をしていた河合政についての回想であるが、当時のジャワ新聞社の様子もよくわかり、貴重な文章である。

以上、他に見落している文章もあるかも知れないが、安田がそのジャワ体験を素材にしたり、あるいは触れたりしている小説、童話、評論、エッセイなどをこれまでに判明している限りにおいて列記した。今後、安田の著作目録の全容を明らかにする必要もあるが、とりあえずは（ジャワもの）という視点からの整理をここでは試みた。

* * * * *

安田のジャワを描いた小説を、そのテーマから分類してみると、二つの特徴が認められるであろう。

第一は、ヒューマニズムの精神に貫かれた作品であり、その代表作は、「シオンの愛子」である。ここでは、モデルとした邑楽（池尻）慎一の実際のイメージによりつつ、クリスチャンとしての信仰と戦争という人間の悪そのものとのジレンマに苦しむ人物が描出されている。それに、「半島出身」のもう一人のキリスト者が関わり、「朝鮮民族」の日本による隷属状況に対しての憤

怒が重なる。主人公は、「われわれ日本人が破壊と殺戮のこの戦争に積極的な抵抗をせずに生きるなら、どんな生き方をしたとてそれは罪悪ではないか」と自問自答する。が、彼をとりまく現実には、そうした問いに応える余地はない。彼は、「せいぜい大きな罪のなかで小さな善を行なうのが精いっぱいなの」であり、「誰かに課される罪の行為を僕が引き受け」たいと思うしか道がないのである。残されたのは悲劇的な結末だけであった。安田は、「シオンの愛子」について次のように述べている。¹⁰⁾

この小説は、邑楽慎一がアンバラワで殺害された、という事実は踏まえているが、設定した状況は一から十まですべて私の組み立てた虚構であったが、邑楽慎一と交際があつた阿部知二は、私への私信で「何ともいいがたい衝撃を受けました。成功いたしました。よくこのことを書いて下さいました。戦争の一つの特異な記録として、そして戦争の中の一人の日本人の重要な記録として、これは永くとどめるべきものと感じました」と書いてよこしてくれた。

阿部知二にも、この邑楽をモデルとした「二つの死」(『中央公論』、一九五三・四)という小説があり、そのことが右に引いた安田作品への賛辞の書かれる動機になつていよう。が、ここで安田作品の設定した問題は、戦争(状況悪)とその下での人間(個人)という容易に解決策が見出し難い極面を剔抉して、深みがある。¹¹⁾

この問題は、「グロドック監獄」にも連なり、「敵国人抑留所の

所長」をしていた日本軍人は戦犯として裁かれようとしているが、捕虜としての強制労役で監獄を訪れた「私」は、彼の家族へ最後の言葉を伝えたいという意思を表わすことでしか人間としての関わりを持ってないのである。「ドスキンの服」、童話「ジャカルタの犬」も、こうしたヒューマニスティックなテーマの設定された作品とみなすことができる。

第二の特徴としては、抒情的、あえていえば官能的雰囲気の漂う作風の作品群が挙げられる。(ジャワもの)の範疇に入らないが、「多佳子幻影」はその代表と言えるであろう。「朝霧」、「歌姫アユム」が、(ジャワもの)では、それを表わしている。短篇ながらも、「メラビの猿」は、第一と第二、それぞれの特徴をかねそなえていて、安田作品全体のもつテーマを小品ながらも鮮かに浮きぼりにしている。

以下、第一の特徴については、すでに論じたことがあるので、ここでは第二の特徴をもつともよく表現した「歌姫アユム」について眺めてみることにしたい。

「歌姫アユム」は、主人公「秋作」がジャカルタで発刊されている邦字紙の記者として赴任し、三か月ほど経って一人の「パプ(お手伝いさん)を指す——木村・注、以下同」を雇つたところから始められている。日本軍による軍政(一九四二・三—一九四五・八)が行なわれていた時期のうち、一九四四年初めから敗戦時までが作品内の時間として設定されている。同勤で中学の先輩にあたる「深田」と、もう一人「福岡」という同僚の住む家を宿

舎とした秋作は、それぞれが自分の「バブ」を雇っているのを見て、それに倣う。公共職業紹介所の紹介票を持ってやってきた「スタダ娘」のアムムは、

……色こそ濃い小麦色をしていたが、日本人に似た顔立ちで、富士額は浮世絵の女を思わせた。背が高く、胸は薄もの、バジュ（衣服のこと）に豊満な二つの隆起をつつんでいて、たくましく張った腰をサロンがきりりと締めて、深瀬とした若さを誇示している感じであった。

という。「ジョンゴス（男の使用人を指す）」は、彼女を見て、劇場で「コロンチオン」を歌っていた娘だと秋作に告げる。

アムムが来てから秋作の生活には潤いが生じる。花瓶に花が飾られ、熱帯魚の水槽が部屋に置かれる。ある日、新聞社にいる秋作にジョンゴスから電話が入る。アムムが大怪我をしたという。瓶を手からすべらし、足の血管を切って出血が激しい。家にいた福岡は、知らん顔をしている。秋作は、彼女に緊急の止血を施し、社のオートバイで病院に連れていく。結局、アムムは一週間も入院するほどの負傷であった。

旧市街のコタで、年に一度の「パッサル・マラム（夜市）」が開かれた。三週間にも及ぶジャカルタ市民のためのお祭りで、秋作も「バブ」や「ジョンゴス」たちを連れて「ワヤン・クリット（影絵芝居）」などを見に行く。アムムは、いつもは通いであるが、この日は、夜市にも行かずに秋作の家に泊まる。その夜のことである。突然、寝ている秋作の枕頭にアムムは身を寄せてくる。

秋作は、夜市での「黒いトビ（帽子）」をかぶってサロンをまわっている人人」を目にして、自らの「異邦人」たるを実感する。それは、ワヤンを見た折にも感じられたことであった。「この人たちとは同じ文化、同じ感情を持」ちえぬのだ、と。ガジュマルの木、ガメランの哀切な旋律。ダラン（影絵芝居の導師）の呪文のような物語、と先ほどの夜市で目にし、耳にしたものは秋作の「孤独感」をかき立てるものばかりであった。そこへ、アムムが身を投げかけてきたのである。

この小説は、秋作とアムムの恋愛物語として進行していく。その発端がアムムの負傷の際の秋作の介護、親切に対しての感謝からくるものなのか、あるいは統治する側の日本人・秋作に、不安定な状況下にいるインドネシア女性が身を委ねようとした故からなのか。秋作は戸惑うばかりであった。時局は、次のような切迫したものとなってきている。

戦局は日に日に敗色を濃くした。沖縄は米軍の蹂躪にまかされていたし、日本海軍はあとかたもなく海の藻屑となっていた。東京空襲は前年の秋からはじまっており、米軍が本土に上陸するのにも、もうさして日数はなさそうだった。遠からずして日本の運命が終局的に決定するのは目に見えていた。イタリア、ドイツはとっくに降伏していた。

敗戦を間近かに控えての日々であったことが、いま引いた文章から知られよう。しかも、敵のジャワ侵攻は確実と思われ、秋作はその時には死ぬよりほかはないと自覚していた。そうしたさ中

に、思いがけなくもインドネシア女性との愛が始まったのである。

陸軍より「徴用」を受け、宣伝班メンバーとしてジャワ上陸の一九四二年三月から一九四三年一月までジャカルタにいた武田麟太郎は、知己となった若き作家志望の庄野英二中尉と毎夜のごとく下町を中心に彷徨していたが、ある時、庄野に「巷の民の声だよ」と言つて、次のような歌を教えたという。すなわち

オランニッポン プルンバン サジャ

オランチナ ワン サジャ

オランインドネシア スサ サジャ

と。「麟太郎の創作ではないか」と思つた庄野の訳では、

日本のトワンは花をつみ

華僑のトワンは金をつむ

憂いにみつるはインドネシア

となる。大谷晃一は、『評伝武田麟太郎』（一九八二・一〇、河出書房新社）の中に、右のエピソードを記している。そっくりそのままではないが（オランチナの行が欠けている）、安田作品にもこの歌は引かれている。大谷本の右の箇所は、単行本刊行の折に「書下ろ」されたもので、安田作品の公表（一九七九年一〇月）の方が早い。あるいは、武田による「創作」かも知れぬが、当時のジャワ在住の日本人の間にはずい分と流布していた歌であつたのかも知れない。日本人の「花」とは、無論、女性のことを指す。いずれにしても、秋作は「巷の民の声」と自分たちの愛とは種を異にするものだ、と思いつつも一種のやましきは拭いきれない

のである。事実、同宿の「深田」「福岡」の両人も、「バブ」との肉体関係を持つていたのである。彼らと自分と、どこが違うのだろうか。

アユムへの傾斜する思いが強まり、また一方、時局を考えあわせての自らの「乱行」への苛責もつのである。アユムは、ついに秋作のイスラム教への改宗、すなわち正式な結婚を迫る。そうした折に、天皇の「終戦の詔勅」を聞く。

ジャワにいる日本軍人あるいは民間の人の中から、次々とインドネシア人女性の誘いによつて、「カンボン（村もしくは故郷）」へと脱走もしくは身をひそめる者が続出する。当然のことながら、アユムは再三再四、秋作にそれをすすめる。

日本の敗戦時、ジャワにいた日本人で、ここに記されたようなインドネシアの人人の導きでジャワに残留した人の数は、正確にはわからないが、おおよそ千五百人にのぼると言われる。当時、ジャワにいた日本人は約八万人余り。かなりの高いパーセンテージであつたことがわかるであろう。

「歌姫アユム」は、女性の愛に身を委ねてこの地に残るか、あるいは苦難が予測されようともあくまでも日本へ帰ろうとするのか、その運命の岐路に立つた男性の心の葛藤が描かれている。しかも、その愛には、自堕落な自己と自らを責める主人公の意識が揺曳している。

敗戦という現実を前に、主人公は故国への思いと女性への愛との板挟みに苦しんだ末、彼女との別離を選択する。実際に戦地、

あるいは他の場所においても、数えきれないほど見つけられた光景の一つであつただろうし、その典型ともいふべき物語がここに確かにあると評せよう。高貴な抒情をたたえ、一方でどこか「うしろめたさ」を漂わしたこの愛の物語は、夏目漱石や阿部知二の描き出した世界にどこかつながっている読後感がある。

冒頭に引いた安田満作品にみられる「風格」との評辞は、(ジャワもの)に対してではなく、渋川玄耳や西郷隆盛にまつわるエピソードを描いた作品に寄せられたものであるが、いま瞥見してきた「歌姫アユム」においても、この「風格」はまちがひなくそなわつていよう。残念ながら紙幅が尽きた。この作家の全容を明らかにするべく、さらにまた、論述の機会を待ちたい。

(未完)

注

(1) 「解説」、「玄耳と猫と漱石と」所収、邑書林、一九九三年三月。なお、大河内昭爾は、この本の出る経緯について、その著『本の旅』(紀伊国屋書店、一九九六・八)所収の「同人雑誌評」にも記している。安田のこの書物に對して、大河内のもとへ司馬遼太郎から「賞賛のお便り」が寄せられ、『東京新聞』紙上で菅野昭正が絶賛した、とのことである。

(2) 「同人雑誌評」、初出は一九九一年九月号「文学界」所収の文章であるが、ここでの引用は注(1)のものに拠

つた。

(3) 「アユム」というのは、作品中におけるインドネシアの女性名であるが、インドネシアでは「アユ」「アユミ」「ユミ」という名は多くあるが、「アユム」はきわめて珍らしい。正式な長い名前の省略形であろうか。

(4) 中国山東省の滄口時代のことを素材にした小説に「瑤瑤」があり、在住時の様子がよくわかる。「九州文学」所載、二〇〇〇年七月。

(5) 「ジャワ新聞」は、一九四二年二月八日から一九四五年九月二八日の間、通巻九九一号まで刊行された。

(6) 住居表示としては、当初、ジャカルタ市モーレンフリート街東八番地であつたが、一九四四年五月より、ジャカルタ市大和橋北通り八番地と呼び名が変えられた。

(7) ジャワ時代の小野佐世男については、拙稿「漫画家(画家)の戦争体験——(ジャワ)の小野佐世男」を参照。「文学史を読みかえる 第四巻 戦時下の文学」所載、インパクト出版会、二〇〇〇年二月。

(8) 「私説 九州の文人たち(四)」、「火山地帯」所載、一九九六年一月。

(9) 拙稿「風流を愛する人・佐藤春夫——庄野英二のジャワ体験(その三)」を参照。「樹林」第三三五号(大阪文学学校)所載、一九九二年十一月。

(10) 前出「傷める輩の人・邑楽慎二」

(11) 拙稿「邑楽慎一論序説——文化の〈再生〉をめざして」参照。「文化の変容と再生」所収、法律文化社、一九九六年四月。

(12) 注(11)に同じ。

〔追記〕 本稿を成すにあたって、安田満氏に種種、御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(きむら・かずあき 本学教授)